

キリストのかたち（5）苦しみと共におられる神

コロサイ 1:23,24

1) 苦しみと信仰

人類はいつの時代も、自然の災害に、国と国との争いに、社会の不正に、家族の問題に、そして自分自身の内面にある罪に苦しんできました。神様は、そうした人々の苦しみを知っていてくださり、その苦しみから人々を救おうと、常に手を差し伸べてくださいました。しかし、多くの場合、その苦しみから早く逃れることや問題が解決することばかりに気が行ってしまい、そこに働いておられる神様の導きや御心に気が付かずに終わってしまうことが多いものです。私たちの苦しみを神様は知っていてくださいます。

旧約時代、ご自分の民として選んだイスラエルが、神様から離れ、苦しみに陥ったとき、神様は彼らに手を差し伸べられました。「わたしは終日、頑なな民に手を差し伸べた。自分の考えのまま、良くない道を歩む者たちに。」（イザヤ 65:2）とあるとおりです。しかし、イスラエルは神様に逆らい続け、その呼びかけに耳をふさいだのです。イスラエルがアッシリヤやバビロンに滅ぼされたとき、外国の人々は、イスラエルの神様には自分の民を救う力がなかったのだと物笑いにし、イスラエルの人々は神様の愛を疑いました。しかし、そうしたことが起こったのは神様にイスラエルを救う力が無かったからでも、神様がイスラエルを救おうとしなかったからでもないのです。神様がイエスラエルを呼んだのにイスラエルはそれに答えず、神様がイスラエルに手を差し伸ばしたのに、イスラエルは、その手を振り払ったのです。「なぜ、わたしが来たときだれもいなかったのか。わたしが呼んだのに、だれも答えなかったのか。わたしの手が短くて贖うことができないのか。わたしには救い出す力がないというのか。」（イザヤ 50:2）と言われました。神様は人を救うためにさまざまな仕方でもその手を差し伸ばしててくださいます。私たちが神様に向かって信仰の手を差し出すなら、神様がその手を握りしめて救ってくださるのです。

もし、私たちがそうした神様の呼びかけ、さし出された神様の手に気付かなかったり、それを無視してきたとしても、まだ遅くはありません。それに気付いたなら、その時点で神様に助けを呼び求めれば良いのです。神様に助けを求めるのに遅すぎることはありません。神様は言われます。「苦難の日にわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出しあなたはわたしをあがめる。」（詩篇 50:15）ふだんまじめに神様を信仰していないのに、苦しみにあって、はじめて神に祈り始めたりすると人はそれを軽蔑して「苦しい時の神様頼み」と言うのでしょ、神様は「苦しい時の神頼み」を軽蔑なさいません。むしろ、「あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美なさい。」（ヤコブ 5:13）と言って、「苦しい時の神頼み」を奨励しておられます。「苦しみ」は人を痛めつけるだけのものではありません。そこから祈りが生まれ、信仰が芽生えます。そして「苦しみ」はいやしの第一歩となるのです。ただ私たちは苦しみの中にあっても、なりふり構わずひたむきに神に祈るというよりも何か斜に構えてしまうところがあります。居直ってしまったり、自己卑下したりするのです。そんなことまでしてと言うのなら、本当に苦しい時の神頼みという域に達していないかもしれません。苦しい時の神頼みを大いに聖書は薦めています。苦しみを通してより神様のすばらしさを体験したいとものです。

2) キリストの苦しみは私たちのため。

「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取る。」詩篇 126:5 のみことばのように信仰者たちは、神様にあっては苦しみが喜びに変わることを知っています。しかし、その苦しみがあまりに大きく深いと、「他の人は私と同じ苦しみを体験していないから、何とでも言えるのだ」などと、人からの慰めや励ましを素直に受け取れなくなってしまうたり、時には「私の苦しみは誰も分からない。神様さえも分からない」と思ってしまうことがあるかも知れません。しかし、本当に、神様に分からない苦しみといたったものがあるのでしょうか。「いいえ、ありません。」神様は、人間の苦しみを高いところから眺めておられるだけのお方ではなく、人間とともに苦しんでくださるお方です。イスラエルはかつてエジプトで奴隷であり、さまざまな苦しみを通って、やっと自分たちの国を作りあげていきました。しかし、まわりの大きな国にいつも苦しめられました。神様はそんなイスラエルの苦しみを見て知っておられただけでなく、彼ら

の苦しみ、痛みをご自分のものとして感じ取っていただきました。イザヤ 63:9に「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、主の臨在の御使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって、主は彼らを贖い、昔からずっと彼らを背負い、担ってくださった。」とある通りです。神様は、人間の痛みや苦しみを超えたところにおられて、それが分からないというではありません。聖書は、いと高い天におられる神様は地上にいる人間の思いを知ってくださり、痛みや苦しみ、悲しみさえも感じ取ってくださるお方、いや人間とともに苦しんでくださるお方であると教えています。

私たちと共に苦しんでくださる神様、このお方を、私たちはイエス・キリストに見ることができます。神様の御子は人となって、人が味わうすべての苦しみ、痛み、悲しみを味わっていただきました。イエスは生まれる前から、また、生まれてすぐ後にも死の危険にさらされました。貧しい大工の子として育ち、ヨセフが亡くなったあとにはその手で一家の生計を立てるため、懸命に働きました。父なる神様のみこころにしたがって宣教を始めると、たちまち反対が起こりました。故郷の人たちに追放され、会堂で教えることができず、野宿をしながら野外で説教を続けました。多くの弟子たちが去り、残った十二弟子でさえ、ひとりイエスを裏切り、他の弟子たちはイエスを見捨てました。理不尽な裁判によって有罪とされ、十字架に引き渡されたのです。十字架は歴史上最も残酷な処刑です。それは人を時間をかけて、じわじわと殺していくもので、肉体的苦しみはもちろん、精神的にもこれ以上のものがないほどに人を苦しめます。十字架にかけられた罪人の中にはその苦しみのために発狂する者も多かったそうです。肉体的、精神的苦痛に加えて、イエスにとって最も大きな苦しみは「神様から見捨てられる」ことにありました。イエスはあの十字架の上で人類の罪を背負い、その罪のために神様の裁きを受けたのです。それまで神様を「父」と呼び、神様との交わりの中にあつた神様の御子が、罪びととなって、神様から見捨てられる、その苦しみをイエスは味わったのです。神様から見放された世界、それを、聖書は「地獄」と呼んでいます。イエスは十字架の上で、まさに地獄の苦しみを味わったのです。

このイエス・キリストが、私たちの苦しみを知らないはずはありません。コリント第一 10:13に「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神様は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」とあります。このことばの中に「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないようなものではありません」とありますが、この「人」とは、イエスのことであると考えてよいでしょう。イエスの知らない試練、苦しみはありません。神様が人となられ、人とともに苦しみ、それによって、人を苦しみから救ってくださる。ここにこそ、私たちの救いがあり、慰めがあります。人はなぜ苦しむのか。神様はなぜ人が苦しむのを許しておられるのか。聖書はそれに対して理論で答えようとはしていません。理論だけでは人の心は慰められず、励まされることもないからです。神様は「苦しみ」の問題に対して、理論ではなく「解決」を示していただきました。イエス・キリストが十字架で私たちのために苦しみ、その復活によって私たちを苦しみから救ってくださる。これが神が示して下さった解決です。

3) キリストのための苦しみ

キリストは私たちのために苦しんでくださいました。そこに「苦しみの問題」への回答があるのですが、聖書は同時に、キリストを信じる者たちに、キリストのために苦しむことも教えています。コロサイ 1:24に「今、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。私は、キリストのからだ、すなわち教会のために、自分の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。」とあります。「あなたがたのために受ける苦しみ」というのは、パウロが福音を宣べ伝えたために牢につながれていることや、人々が正しい信仰を保つために、間違った教えと戦い、人々を教え続けていく労苦のことを言っています。パウロは、正しい信仰から離れてしまったガラテヤのクリスチャンのために「私の子どもたち。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。」(ガラテヤ 4:19)と言っています。これは、人々が霊的に成長するため、また、そうした

人々によって教会がキリストのからだとして成長していくためには大きな苦しみに伴うことを言っているのです。

さらにパウロが教会のために苦しんだ苦しみは同時に、キリストの苦しみでもありました。パウロがまだ「サウロ」という名前で、教会を迫害する者だったとき、キリストはサウロに現われて、「サウロ、サウロ。『なぜわたしを迫害するのか』」（使徒9:4）と言われました。サウロが迫害していたのは「教会」でした。しかし、キリストは「なぜ教会を迫害するのか」とは言わず、「なぜわたしを迫害するのか」と言われたのです。これはキリストの「からだ」である教会を迫害することは、教会の「かしら」であるキリストを迫害することと同じということを言っているのです。キリストは教会をご自分と同一視するほどまでに、教会を愛され、教会の苦しみをご自分の苦しみとさせていただきます。ですから人の信仰者としての弱さや足りなさ、教会の弱さや足りなさが見えた時にはそれがキリストの苦しみの欠けたところを知ったということになります。

パウロが「キリストの苦しみの欠けたところを満たしている」と言ったのは、キリストの十字架での苦しみが不十分であったという意味ではありません。キリストの十字架の苦しみは、あらゆる人を救ってあまりあるものです。私たちの罪の負債はイエス・キリストの十字架によってすべて支払われました。キリストの十字架の苦しみに何かをつけ加える必要はないのです。しかし、キリストを信じる者は、キリストを苦しませるだけで、自分たちはソファーでくつろいでいることはできません。主イエスといっしょに苦しみ、悲しみを共にしたいのです。

キリストの苦しみの欠けたところとは、具体的には、教会に欠けているもの、また教会が必要としているものかもしれません。私たちには何が欠け、私たちは何を必要としているのでしょうか。多くは霊的な、内面のものでしょう。もしそれが祈りであるなら、信仰を持ち、忍耐を尽くして祈ることによって欠けを満たしたいと思います。それがみことばであるなら、ひとりびとりがキリストのことばを豊かに住まわせるために、何ができるかを考えて実行したいと思います。世の中は就職難ですが、神様の国はいつも求人難です。教会の奉仕にはいつも人が足りません。人や教会の弱さが見えた時にこの欠けが満たされるように、キリストと苦しみを共にしていきましょう。